別紙

ちば会議 vol.4　ゲストスピーカープロフィール

 ゆーちゃんふぁーむ 太田　裕輔　氏	昔から「みんなと違う選択肢を選びがちだった」と語るのは、緑区越智町で「ゆーちゃんふぁーむ」を営む太田裕輔さん。小学生の時から英語に興味を持ち、中学生でパンクバンドに目覚めた少年は、大学生の時、就職活動に疑問を持って、就職せずに農家の道を進むことを選びました。 一時は海外でパンクバンドを組んでいた時期もあったといいますが、ある時から目覚めたのは、曲や見てくれより大事なことは、自分がどう生きるかということ。気づけば、誰に教わるわけでもなく、見様見真似で、作物を作ることを繰り返すようになっていきました。初期の頃から変わらず大切にしているのは、あらゆるものを自分たちの手でつくること。栽培には、農薬・化学肥料は使用せず、タネは固定種・在来種、自家採取のものを使って、循環する農業のスタイルを貫いています。 コロナ禍で感じたのは、ただものが売れるだけでは、自分たちがつくりたい世界は実現しないということ。様々な機会を提供するようになってから、次第に、顔の見えないお客さんは減り、共につくる仲間が増えて、今の CSA（Community Supported Agriculture）のスタイルができあがってきました。鳥や豚を育てて今度はヒツジを飼いたいと言い、在来大豆を育てては、みんなでそれを収穫して楽しむ。欲しい暮らしを自分たちで創り出す動きが、緑区ではじまっています。 そんな暮らしを誰よりも無邪気に楽しむ子どもたちの姿を見ては、俄然やる気を漲らせる太田さん。自分たちの活動を慕って、仲間がもっと増え、目の前にある土地や畑で、個々がもっと輝けるようになれば、きっと、いいまちができる。目指すは「まちづくり農家」です。ちば会議［vol.4］では、ゆーちゃんふぁーむ代表の太田裕輔さんに、これまでの歩みとそのチャレンジの数々についてお話しいただきます。
 株式会社 hamoru 千葉　広宣　氏	不協和音が響いていたら、それを取り除くのか、寄り添うのか――――。若い頃からバンドマンとして長く過ごしてきた千葉広宣さんは、この夏、幕張のまちを盛り上げるために会社員生活を続けながら始めた活動をベースに、株式会社 hamoru を設立しました。 本業はファッション通販サイトのコンタクトセンター業務で、ある意味「稼ぐ」ためにはじめたその仕事は、やがて「手に職」となり、顧客の声を起点に「課題発見から改善活動」までを合言葉に、コンタクトセンターの世界を極めてきました。やがて千葉さんは、かつてバンドを組んだように「チームをつくる」ことを意識し始め、さらに、子どもの誕生をきっかけに、次の世代を育てたり、きっかけをつくることに自然に目が向くようになりました。2021 年に花見川区幕張町（通称”こっちの幕張”）に自宅を移した千葉さんは、2024 年、パパママ世代と子どもたちが主役になれる場づくりを目的として「幕張セッション」をスタート。つくられた場所を楽しむではなく、自分たちで何かをつくり出せる、そんなまちを創りたいと語る千葉さんですが、幕張のまちにも、コンタクトセンターの職場にも、いいハーモニーやイケてるグルーヴを出すのが、いつだって、千葉さんの目指すべき姿です。46 年続き、2023 年惜しまれつつ一度閉じた『CHIBA BLUEGRASS FESTIVAL』の想いを幕張セッションの中で継いだのも、未来に新しい文化の土壌を耕すため。ちば会議［vol.4］では、株式会社 hamoru 代表取締役で、幕張セッションを主宰する千葉広宣さんに、これまでのキャリアとその取り組みに込めた想いについてお話しいただきます。

別紙

ちば会議 vol.4　ゲストスピーカープロフィール

千葉大学／地域創生
TONKAN 千葉
星子　葵　氏

建築土木の学生を支える新しい空間「千葉 TONKAN」が拠点を構えるのは、宮野木ジャンクションに程近い、稲毛区柏台にあるファミールハイツ。建築土木学生が施工・運営するコミュニティスペースとして、全国各地にその拠点を増やしている TONKAN ですが、団地の一角にオープンするからこそ”地域創生”を謳い、学生同士の交流・活動の場としてだけでなく、地域との交流や連携にも積極的に力を入れようとしています。代表を務めるのは、千葉大学の建築学生でもある星子葵さん。星子さん自身、小さい頃はスポーツばかりしていたと言いますが、高校時代は工作部に所属し、学園祭の時に作ったアーチが好評だったことも一つのきっかけとなって、建築の道を進むことを決めたのだといいます。
千葉 TONKAN の代表になったのは、ファミールハイツの共用部分をどうするかというコンペに参加したことがきっかけ。大学に入り、仲間もできてバイトも経験して、何か物足りなさを感じ始めていた星子さんは、意を決して、学校で”つくる”ことを学ぶだけでなく、学外で”つくって運営する”ことにもコミットするようになりました。
何より楽しいのは、千葉工業大学や日本大学など、学外の仲間とつくりあげていくそのプロセス。今月末 11/30 にグランドオープンする千葉 TONKAN で「やりたいと思ってできずにいたことを、チャレンジできる場にしていきたい」とその想いを語ります。
まちへ出るようになって、さまざまな大人たちとの出会いが、次なる機会へと発展していくことも体感し始めている星子さん。ちば会議［vol.4］では、千葉 TONKAN 代表の星子葵さんに、千葉 TONKAN への想いと、学生がまちで活動することの可能性についてお話しいただきます。

KARAPPO Inc.／対話 WS
ユニット TOITOY
三尾　夏生　氏

三尾夏生さんは、千葉大学を出た後、都内の実家に戻り、店舗デザインの仕事や飲食関係の仕事をしていましたが、結婚のタイミングで千葉にカムバック。ご主人が大学の後輩と立ち上げたデザイン会社 KARAPPO に「ゆるゆると加わったんです」と語ります。
最初は、社員食堂「からっぽ食堂」の食堂長を務めていたそうですが、2014 年にデザイナーとして正式参加することになります。
その後、出産/育児と、ステージに合わせて、働き方をチューニングしてきました。国内大手企業や地元千葉の企業・行政などをクライアントに持ち、様々なプロジェクトで活躍を見せている同社ですが、その中で、家事や育児をやりくりしながら、今は主に、考えたり、書いたり、企画したりといった仕事に力を注いでいるのだといいます。
2回目の育休・産休中に、子どもの哲学対話の存在を知り、「こんな場が自分の住む街にあったらいいな」と、「TOITOY（トイトイ）」の活動をスタート。「問いをあそび、おもしろがる。」をコンセプトに、千葉で対話の場をつくっています。
千葉で働き、千葉で暮らし、千葉で育てる。千葉で学んだ後、千葉を巣立ってしまう人たちが少なくない中、三尾さんの背中が、千葉の可能性を語ってくれている気がします。ちば会議［vol.4］では、株式会社 KARAPPO デザイナーで、TOITOY を主宰する三尾夏生さんに、これまでのキャリアと千葉での働き方・暮らし方についてお話しいただきます。